

「大判事」覺書

鳴澤孝輔



文樂座の四月

狂言「妹背山婦
女庭訓」山の段
の大判事を榮三
が遣つた。かし
らは「鬼」薄

玉子釐り、あたまはごま油附二つ折である、
(齋藤清二郎氏の文樂人形圖解に據る)

▽：「大判事様御入り」「後室様御出」と呼
ぶ聲に久我之助と雛鳥とが互ひに心を殘して
夫々の庵に姿を消す「花を歩めど武士の心餘
組刀し、創るが如き物思ひ、思ひ逢瀬の中
を裂く」の「川邊傳ひに」で上手の横幕をひ
かせて大判事、右の手を左袖に、左の手を右
袖に入れて腕を組み面を伏せて現はれ「大判
事清澄」で上手寄り正面向きにてトン／＼と
束に立つて極り腕を解く。下手妹山の方に同
じく定高が現はれて、大判事様お役目御苦勞
に存じますと會釋するので「清澄も一揖し」

で定高の方に首をひねつてから妹山の方に向
ひ合せとなり「早かりし定高殿」一寸上手を
見返り乍ら「御前を下るも一時、參る所も一
つなれども」右手奥の方を見て「この背山は
身が傾分、妹山は其許の御支配」と首を下げ
る「川向ひの喧嘩とやら」と反り身になり「
睨合ふて日を送る此年月」首を正面にまはし
「心解けるか解けぬかは」反り身「今日の役
目の落居次第」體に力を入れて首を振り「二
つ一つの勅命」體を反らせ「狼狽へた捌きめ
さるゝな」と右手を前に突出し首を正面へひ
ねつてから左の膝頭を高々と上げて下し、伸
るやうにトンと極り「蹴くしやつく茨道」で
右足をトンと正面へ踏み出すと共に同じく正
面に向けた顔の眉を一杯に引上げて憎々しい
表情を充分に見せておいて右足を引き寄せて
トンと極る。

▽：定高が入鹿様の御詮意を子供が承知せ
ぬ時はと聞くので、大判事は定高の方に首を

ひねつて「ハテ知れたこと」改めてその方に
向き直り「御前で承つた通り首打放す分の事
」と力む「不所存の伴はあつて益なく、なう
て事缺けず」首を振り「身の内の腐は」反り
身「殺いで捨つるが跡の養生」と前にのり出
し「畢竟親の子のと名を付けるは人間の私」
首を正面にまはし「天」右肩を落して左手の
上を見上げ「地から見る時は」トン／＼と正
面に束に立つて下を見下し「同じ世界に湧い
た蟲、別に不便とは存じ申さぬ」と妹山の方
に向き首を正面にひねつて眉を上げて、それ
から首を垂れる。

▽：定高が忝い入鹿様のお聲のかゝつた身
の幸ひ、たとへどう申さうとも母が勸めて入
内させますと云ふので、大判事は「ウン」
と後に引いた體を前にのり出して「シテ又得
心せぬ時は」と首を振る。定高は枝ぶり悪い
櫻木は切つて接木を致さねば、太宰の家が立
ちませぬと答へる。「ヲツ、ヲツ……さうな
くては叶ふまい」右手を前に突出して左の肩
を引いて體に力を入れて揺り「此方の伴とて
も得心すれば身の出世、榮華を咲かす」で床
は待合せとなり上手の櫻の枝を折つて正面と
なり「此の」とトンと右足を踏出すと共に右

の櫻の枝を突出し「一枝」と續けて左足をト
ンと引き寄せる「川へ流すが知らせの返答、
盛りながらに流るゝは吉左右、花を散らして
枝ばかり流るゝは」櫻の枝を逆に持つてその

切口に目を移し「伴が絶命と思はれよ」と櫻
の枝を元の通り持ち直して前に枉げたまゝ體
をのり出す。定高も櫻の枝を折つて、娘の命
生花を散らさぬ様に致しませうと云ふので「
ヲ、サ今一時が互の瀬越し」と體を起して搖
り動かし「此の國境は」櫻の枝を右脇に引き
つけ「生」首を正面へ刻む様にまはして肩を
引上げ「死の境」と反り身となつて體を搖り
「返答の善惡に依つて遺恨に遺恨を重ねるか」
となる。定高「サアこれ迄の意趣を流して、
中吉野川と落合ふか」大判事「先づそれ迄は
双方の領分」と反り身となる。お捌きを持つ
てをりますと定高が頭を下げるので、大判事
も會釋して「阿咄つ」反り身となり「親と親」
左足をトンと正面に踏み出すと同時に首を
正面にまはし「山と」で右足をトンと引いて
體毎正面となり「變らぬ紀の路」でトン／＼
と左、右の膝頭を上下させて繰り「恩愛の胸
は霞に埋もれし庵の」で定高の方へ首をひね
つてから、トンと上手の方へ右足を踏み出し

額を正面にまはしてから、トンと眞上手向き
となり、向ふへ廻つて屋體へ入つてそのまゝ
障子を閉める。

△：妹山の方では定高が雄鳥「久我之助の
命を助ける爲め入内して貞女を立てよと説き
障子をとざす「重き脊山の」で脊山の方障子
を取拂ふ。下手寄りに大判事正面を向いて坐
り左の手を右袖に、右手を左袖に入れて腕を
組んで面を伏せてゐて、上手の久我之助が切
腹御免下さる事、大慶至極と手をつく「黙
然たる大判事や打調む」で面を少し持ち上
げて震はせるが再び深々と垂れるけれども「
カット寫眞參考」目を開きで、首を軽く振
つて面を上げ、兩手を解いて膝において久我
之助の方に向き「今朝入鹿大臣……先帝御龍
愛の采女」首を正面にまはし「……其方が伴
久我之助、人知らぬ方へ落しやりしに極れば
」正面向ふを見て「必定」と反り身「汝等が
方に匿ひあるべしとの難題」と久我之助の方
に體をのり出し「……狼澤の池に入水の體に
もてなし」右手を前に出して開いて眺め「密
に落し参らせしは」再び體をのり出して「な
か／＼久我之助が智恵でない」首を振り「鎌
足公の指圖を受けての計らひ」右手を開いて

上に駢して頭を下げ「……知つたは身も今日
が始め……大事を洩さぬ心の金打」右手を枉
げて胸に寄せ「若輩者には」久我之助を見や
り「神妙の次第」と首を正面にまはして體を
搖り動かし「ハハア」と體をのり出し「出来
かしたり」體を起して首を正面へまはし「と
思ふに付け」と首を垂れて「邪智深き入鹿、
久我之助が降参せば命を助けん連れ來れと」
右手を開いて上に駢して、それを前に下し「
情の詞に釣り寄せて拷問にかけん謀」右手を
握つて前に突出し「責殺さるゝ苦みより」右
手を胸に當て「切腹さすれば采女の陰謀の根
を斷つ大功」右手を斬るやうに上から下し「
天下の主の御爲には」右手を開いて頂き「何
伴の一人など」左手を開いて久我之助を指差
し「薙に生える草一本」と正面となつて縁に
にじり出で右手で庭を差し「引くよりも瑣細
な事」と右手を右から前に伸して引抜く仕方
をして久我之助を見返る。そして「涙一滴こ
ぼさぬ武士の表」右手をまげて胸に寄せて、
面を伏せ「子の可愛うない者が凡そ生ある者
にあらうか」左手を開いて久我之助を指差し
て、右手は膝に突張つて「餘り健氣な子に恥
じて」右手を胸に當て「親が介錯してくれる

向ふを眺め「ヤア雄鳥が首討つたか」となり定高の「久我殿は腹切つてか」にかぶせて「ハアしなしたり」トン／＼と右手を出し左手を出し後は両手を前に泳がせると共に足踏みをするが、一寸両手を柱にかけて堪えて「……悔むも泣くも一時に呆れて詞もなかりしが」一杯にトン／＼と足拍子を入れて下に伏し、又ヨロ／＼と立上つて正面にまはりそのまゝ両手を膝へ置いて首を垂れる。

▽：定高が「入鹿大臣へ差上ぐる雄鳥が首御檢使受取り下され」と呼はるので、大判事肩衣を着けて正面となり「……歎きの姿改めて、衣紋繕ひ」の文句通り襟を正し袂を拂つて立上りカチャ／＼と庭下駄を穿いて船底に下り「しづ／＼とおりに立つ」一杯に勾欄のところに正面となり、定高も雄鳥の首を抱いて庭に下る間に川邊に進んで、斜下手向きで腰を下し、両手を膝におく。（これから大判事、定高の船底での動きに庭下駄の音を聞かす）せめて久我之助殿の息ある中に此首を其方へお渡し申すが、娘を嫁入りさす心と定高の詞を受けて「實に尤も」と體を起し定高の方に向き直り「嫁は大和婚は紀伊國」屋體の内に俯伏した久我之助を指差して妹脊の

山の中に落つる吉野の川の水盃」右手奥の川を見「櫻のはやしの大島臺」左手の上を見上げた目を右手の上に移して行き「目出たう祝言さしませうわい」と首を垂れる。定高が是迄の心も解けてと尋ねるので「ハテ互に姉同志」と右手を前から下手の方へ押しやるやうに伸して首を左へ捻る。

▽：雄の道具流しとなる、後向けとなつて肩衣を脱いで、竹のかきよせを持つて正面となり「未來へ送る嫁入道具、行器、長持、犬張子、小袖簾笥の幾棒も命ながらへ居るならば……」の節の間、簾笥、挿み箱、長持、櫻に橋の順で流されるのをかきよせで岸へかきよせては水を切つて久我之助の前の縁側におく「記念も仇の爪琴に首取乗する弘誓の船」で今度は爪琴に雄鳥の首を乗せて兩端にぼんぼりを置いたるを流さうとする様子を見て、縁に置いた太刀から小束を抜きとり下げ緒を結んで元の位置に戻り、流れ寄る爪琴の距離を測つて投げつけ、両手で手繰り寄せるのが「あなたの岸から彼の岸に」で、両手でとり上げて久我之助の前に置き、縁側の前の手水鉢から柄杓を持て川岸に進み、塵を流して水を汲み上げ「今はの容貌見る親の」で久我

之助を見返つてウレヒで首を垂れ「口に祝言心の唱名」でカチャ／＼と庭下駄の音をさせて力なく立上り「千秋」カチャ「萬歳」カチャと上手へ進むと體が震へて柄杓の水が漏れるのをそのまゝ縁側へ行つて先づ久我之助に飲ませ、後雄鳥の前に置く。後へ退つて久我之助と雄鳥の首とを見比べて「生きて居る中此様に嫁と嫁と言ふならば……」となり「……其上重なる入鹿の疑ひ」と腰を浮かして土手を見「中直るにも直られぬ義理になつたが二人が不運」と首を垂れ「……とても死なねばならぬ子供、一時に殺したは」右手を前に出し「未來で早う添はしてやりたさ」と首を垂れる「言合さねども後室には」と妹山の方に向き直り「是迄不和な大判事、姫と思召せばこそ、忤に立て」首を捻つて久我之助を見返り「一人の娘、ア、よくこそ手にかけてれし」右手を頂くやうに前に伸して首を下げ「こゝれこれ／＼」と両手をとり合ひカチャ／＼と三つ膝を進めてから左膝を一つ戻して「過分に存ずる定高殿」となる。定高が手しほにかけて育てた子を、又手にかけて切る心と悔むので「サ、推量致してゐるはサ」右手を出して止め「武士の覺悟は常ながら、

まさかの時は取亂し、介錯仕後れ」屋體の方を見返りて「面目ない」と右手を前に出して首を正面へまはし、體を上手斜にそむけて、首を垂れる。定高の婿殿の無紋の上下の詞を受けて「首ばかりの嫁御寮に對面せうとはしならんだ」と腰を浮かして縁側の雛鳥の首を見返つて首を下げる。妹山の方に向き直つて「……世の中の子といふ文字に死の聲の有るも定なる宿業」と首を垂れ、定高と一緒に立上つて双方から見合ひ「隔つる心親々の積る思ひの山々は」で定高と共に兩手を泳がせ乍らカチャ／＼と後へよるけ「とけて流れて」一杯に兩手を前に出した形で踏止り「吉野川いと漲るばかりなり」兩手を上に振るやうにして上手斜向きに坐り兩手を膝において眉を一杯に上げて堪え、首を垂れる。

▽：「涙はらうて大判事」で兩手で涙を押へて立上り、屋體に入つて久我之助の上手に坐り、雛鳥の首をその前に引き寄せ「伴清舟承れ、人間最期の一念によつて輪廻の生を引くとかや」右手をひらけて出し「忠義に死する汝が魂魄……朝敵退治の勝軍を」首を正面にまはし「草葉の蔭より見物せよ」と左手を開いて上に翳し、それから右手を久我之助の

脊におき「今雛鳥と改めて親がゆるして盡未來、五百生まで變らぬ夫婦」と左手に雛鳥の首を取つて久我之助の顔に近づけ「忠臣貞女の操を立て死したるものと高聲に」と久我之助の耳元に口を寄せて聞かせ「閻魔の廳を名乗つて通れ」右手を後から前の方に廻して出し「南無成佛得脱」と大きく合掌する。と久我之助も同じく合掌しやうとして出来ないのを見て右手を肩に左手で助けて合掌させてやる。

▽：「首は脊山に檢使の役目」で左手に太

刀をとつて立てかけ「……大和路や」で右手に抜き立上つて久我之助の前に突出し「……先だつ脊山、恩愛義理を堰下す」その太刀を右肩の上に立てかけて久我之助の姿を見下すが「涙の川瀬」で顔を仰向けて泣き上げる。左足を「踏み出してハッ」と氣合を入れて斬り下し、兩手を上に打振り乍らどうとなり「花を見捨て」で氣をとりなほし左手に久我之助の首を上げて持ち、右手には雛鳥の首を下げて持ち、左足を縁側から踏みはづして大きく振る。(四月五日見物)

祝 四 百 號 發 刊

其	眞	寫	
他	修	出	網
諸	張	張	目
版	整	影	銅
		版	版

植野寫眞製版所

大阪市西區江戸堀下通四丁目四十番地
(幼稚園前)

電話土佐堀 六三二二番
振替 座大阪九一二四五番